

子どもの言語獲得から見た英語の結果構文と 使役移動構文の関係について

On the Relationship Between the English Resultative and Caused-Motion Construction from the Viewpoint of Child Language Acquisition

本多 明子[†]

Akiko Honda

[†]神戸女子大学

Kobe Women's University

a-honda@yg.kobe-wu.ac.jp

概要

The purpose of this study is to examine the relationship between the resultative construction and the caused-motion construction in English in terms of language acquisition. These two constructions are extracted from CHILDES (MacWhinney, B. (2000)), and the results of data analysis are presented. Based on the results, we explain how children recognize change of state and change of location, and encode them by using the resultative construction and the caused-motion construction, based on the idea of inheritance links in cognitive linguistics and Construction Grammar.

キーワード：子どもの言語獲得，構文ネットワーク，
構文継承，結果構文，使役移動構文

1. はじめに

近年，認知言語学が提唱する「構文ネットワーク」は構文研究における重要な成果の一つである。用法基盤理論 (Usage-based model)，構文文法論 (Construction Grammar) に基づく研究により，文法体系を構築する構文の存在だけでなく，構文同士が有機的な結び付きにより，ネットワーク (Inheritance Network) を形成していることを見出してきた (Lakoff (1987), Goldberg (1995), (2004), (2006))。構文文法論では，構文ネットワークにおいて，構文の間の一定のつながりを継承関係という考えにより説明する。意味的にも形式的にも関連性をもつ構文は継承リンク (Inheritance Link) によって結ばれており「多義性のリンク」，「具体例のリンク」，「部分関係のリンク」，「メタファーの拡張のリンク」を仮定している。継承を使うという考えは，Goldberg によるとデータ構造をできるだけ一般的な形で表す方法としてコンピューター科学で端を発し (cf. Fahlman (1979), Touretzky (1986))，それ以来，多くのプログラミングや知識表現システムにおいて有用であることがわかって

きた。

構文文法論ではデータ構造は構文を指す。たとえば，英語には，本稿で取り上げる使役移動構文 (Caused-Motion Construction) と結果構文 (Resultative Construction) と呼ばれる構文が存在する。構文とは，形式と意味が対になったものであり，使役移動構文と結果構文は，それぞれ(1)と(2)に示す形式 (form) と意味 (meaning) を持つ。

(1) Caused-Motion Construction (使役移動構文)

Form : [Subj V Obj Obl_{path/loc}]

Meaning : Subj causes Obj to move Obl_{path/loc}

(2) Resultative Construction (結果構文)

Form : [Subj V Obj RP]

Meaning : Subj causes Obj to become RP

尚，Subj は Subject，V は Verb，Obj は Object，Obl_{path/loc} は Oblique_{path/location}，RP は Resultative Phrase を表す。

Goldberg によると，構文間の継承ネットワーク内で，結果構文は使役移動構文と(3)に示すメタファー的拡張の継承リンクによって関係づけられている (cf. Lakoff and Johnson (1980), Lakoff (1990))。

(3) CHNGA OF STATE AS CHANGE OF LOCATION
状態変化を位置変化と捉えるメタファーにより，結果構文は，使役移動構文から拡張された構文として分析されている。構文継承ネットワークにおいて，結果構文と使役移動構文を関連しながらも独立した構文と分析するには，幾つかの理由があることが論じられている。その一つに，一方の構文にしか生起できない動詞がある。*マークは，ここでは非文法的であることを示す。

(4) a. It made him sick/ into a better man.

b. ?* It made him into the room.

(Goldberg (1995: 87))

(4a)に見るように，動詞 make は結果構文に生じること

ができるが, (4b)に見るように使役移動構文には生じることができない. それに対して, 動詞 *move* は, (5a)に見るように, 使役移動構文に生じることができるが, (5b)に見るように結果構文に生じることができない.

- (5) a. He moved it onto the top shelf/ away.
b. * He moved it black.

(Goldberg (1995: 87))

その他にも, 結果構文の目的語は *patient* (被動作主) であるのに対して, 使役移動構文の目的語は *theme* (移動するもの) であり, 意味役割が異なっている. この点は, 被動作主性テスト (Lakoff (1976)) から確かめられる.

- (6) a. Joe moved it onto the table.
b. ??What Joe did to it was he moved it.

(Goldberg (1995: 87-88))

このように, 結果構文と使役移動構文は関連しながらも, 異なる特性を持つ独立した構文であるということを経験関係という考えにより説明することができる.

2. 目的・方法

本研究では, 英語の使役移動構文と結果構文の間の経験関係について, 言語獲得の側面から考察することを目的とする. 収集した発話データの分析を通して, 子どもの状態変化 (Change of State) に対する認識についても考察する. ここでは, 発話データベース CHILDES (MacWhinney, B. (2000)) を使用して, 英語を母語とする3名の子ども (女兒 Lara 1 歳から 3 歳, 男児 Kuczaj 2 歳から 5 歳, Thomas 2 歳から 4 歳) を対象に調査を行った. 以下では, 1 歳 1 ヶ月を (1;01) のように表記する.

3. 結果と考察

発達上の構文の出現順序を見てみると, 3 名の子どもに共通して観察されたのは, 状態変化を表す結果構文に比べると, 位置変化を表す使役移動構文の方が早く出現していたということである (cf. 拙論 (2019)). 使役移動構文は 2 歳前後から使用が見られ, 特に, 3 名とも初めのうちは動詞 *put* を用いる頻度が高かった. 動詞の *put* は, 使役移動構文での使用頻度が最も高い動詞である (cf. Goldberg (2006)).

[Caused-Motion Construction]

- (7) Kuczaj
a. put it on the desk. (2; 06)
b. okay ‡ let's put it in this [//] in that bowl. (2; 06)

- c. I wanna put this in [//] <in the> [//] in the place the kitty cat goes. (2; 06)

- (8) Lara
a. put her in it then. (1; 11)
b. put it in the kitchen. (2; 01)
c. put it on the little chair. (2; 02)
- (9) Thomas
a. I'm going to put some DairyLea cheese spread on this, Thomas. (2; 01)
b. don't put the tissues in your mouth. (2; 04)
c. put it in big lorry. (2; 07)

その後, *take*, *throw*, *bring* など *put* 以外の動詞も, 使役移動構文に出現し始めた.

- (10) Kuczaj
a. you can take it to Greggys house. (2; 09)
b. I'm gonna throw this at that. (2; 10)
c. just bring it to me. (3; 03)
- (11) Lara
a. can I take this to nursery? (2; 07)
b. I'm just gonna [: going to] throw this in the bin. (2; 11)
c. you can make me my breakfast and bring it to me in bed. (3; 02)
- (12) Thomas
a. I not take it in the trolley. (2; 09)
b. throw it in the dustbin wagon, Daddy [?] [//] Mummy. (2; 09)
c. can you bring it to me? (4; 03)

注目すべきは, 3 名の発話において, 使役移動構文を獲得してから次のような表現が観察されたことである.

- (13) a. I [//] I put it nice and straight, look. (Lara 3; 02)
b. put your legs flat, okay? (Kuczaj 3; 04)
c. Mummy, put [//] just leave it open. (Thomas 3; 05)

動詞 *put* の後に目的語と形容詞が生じている. 先に見たように, この動詞は, 本来, 目的語で表される指示対象を移動させるという意味を表し, *Obl* の位置には到着点や方向を表す表現がくる. しかし, 3 名の子どもの発話を見ると, その位置には状態を表す形容詞が生じていた. 子どもは, 目的語の名詞 (句) の結果状態を記号化するのに, 位置変化を表す使役移動構文での使用頻度が最も高い動詞 *put* を用いていた. 認知言語学の考えに基づけば, (13a-c) の発話には, それぞれの子どもの認知のありようが映し出されているといえる. 結果状態を

物理的な到達点のように子どもは認識していたと考えられる。

1節で見たように、認知言語学、構文文法論の考えに基づくと結果構文はメタファー的な位置変化を記号化している。

(14) CHNGA OF STATE AS CHANGE OF LOCATION

a. Subj causes Obj to move Obl_{path/loc}

b. Subj causes Obj to become RP

(14a)は起点領域 (Source Domain)で、(14b)は目標領域 (Target Domain) である。状態変化を位置変化と捉えるメタファーにより、(14a)の意味構造が(14b)の状態変化の意味構造に写像された結果であるとみなすことができる。これにより、結果構文は使役移動構文とメタファーリンクによって関連づけられる。

(13a-c) には位置変化という起点領域から状態変化という目的領域への子どもの意味理解のプロセスが見て取れる。(15)と(16)に見るようなメタファーが働き、状態を位置のように、変化を移動のように捉えていると考えられる。

(15) States Are Locations

(interiors of bounded regions in space)

The mapping: Locations → States

(16) Changes Are Movements

(into or out of bounded regions)

The mapping: Movement → Change

(Lakoff and Johnson (1999))

つまり、あるものの状態が変化するという事象が、(15)と(16)のメタファーにより、新しい位置への移動のように認識され、その認識を反映する形で言語化したものが(13a-c)であるといえる。

結果構文の獲得について、Lara については記録の期間内では形容詞を伴う結果構文の出現が確認できなかったが、Kuczaj と Thomas においては、次のような発話を確認できた。

(17) a. squash them flat. (Thomas 4; 11)

b. somebody knocked the Lone_Ranger unconscious. (Kuczaj 5; 00)

(17a, b)は、それぞれの子どもが母親に発話したものである。(17a)では、動詞squash (押しつぶす) という行為によって、目的語 (them) がflat(平らで薄い状態)になるという結果状態が表されている。同様に、(17b)でも、knocked (強打した) 結果、目的語 (Lone_Ranger)がunconscious (気絶した状態)になったという意味が表されている。(17a, b)では、結果構文の意味構造的特性に

合致する形で、原因となる具体的な行為とともに、その行為によって引き起こされる結果状態が、特定の動詞や形容詞で言語化されている。子どもは、日常の経験や体験を基盤にしながら一つひとつの行為がどのような結果を引き起こし、それらがどのように言語化されるのかを理解しながら、結果構文の獲得に至ると考えられる。

4. おわりに

本論文では、認知言語学、構文文法論における英語の結果構文と使役移動構文との関係について言語獲得の側面から考察を行った。両構文は、一つの形式で原因と結果という二つの事象を言語化し、因果関係を表す点では一致するが、前者は位置変化を、後者は状態変化を言語化する点で変化の種類が異なっている。状態変化を表す結果構文は、位置変化を表す使役移動構文に比べると、獲得時期が遅く、また、使役移動構文の獲得後には、使役移動構文の出現頻度が最も高い動詞のputを用いて状態変化を言語化していることが確認された。結果構文と使役移動構文は、構文ネットワーク内でそれぞれ独自性を持つ構文でありながらも、状態変化は位置変化であるという一般的な空間化メタファーによって、結果構文は使役移動構文によって関係づけられる構文であるとみなされる。

謝辞

本論文の執筆にあたりまして、査読委員の先生方に変え貴重な御意見を賜りました。この場をお借りして心より感謝申し上げます。本研究は JSPS 科研費 23K00583 の助成を受けたものです。

文献

- [1] Fahlman, Scott (1979) *NETL: A System for Representing and Using Real-World Knowledge*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- [2] Goldberg, A.E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, Chicago: University of Chicago Press.
- [3] Goldberg, A.E. and R. Jackendoff (2004) "The English Resultative as a Family of Constructions", *Language* 80, 532-568.
- [4] Goldberg, Adele E. (2006) *Constructions at Work – The Nature of Generalization in Language*, Oxford: Oxford University Press.
- [5] Honda Akiko (2019) 形容詞を伴う結果構文と Make 使役構文の獲得について (On the Acquisition of Adjectival Resultative Constructions and Make-Causative Constructions in English), 日本認知科学会第 36 回大会論文集, (OS10-7).
- [6] Lakoff, George (1976) *Towards Generative Semantics*, J. D.

- McCawley, ed., *Syntax and Semantics 7: Notes from the Linguistic Undergraound*, 43-61, New York: Academic Press.
- [7] Lakoff, George (1987) *Woman, Fire, and Dangeous Things: What Categories Reveal about the Mind*, Chicago: University of Chicago Press.
- [8] Lakoff, George (1990) “The Invariance Hypothesis: Is Abstract Reason Based on Image Schemas?,” *Cognitive Linguistics* 1, 39-74.
- [9] Lakoff, George and Mark, Johnson (1980) *Metaphors We Live By*, Chicago: University of Chicago Press.
- [10] Lakoff, George and Mark, Johnson (1999), *Philosophy in the Flesh: the Embodied Mind & Its Challenge to Western Thought*, New York: Basic Books.
- [11] MacWhinney, B. (2000) *The CHILDES Project: Tools for Analyzing Talk*, 3rd ed. Vol.2, *The Database*, Mahwah, N.J.: LEA.
- [12] Touretzky, David S. (1986) *The Mathematics of Inheritance System*, Los Altos, CA.: Morgan Kaufmann.